教育

✉edu@asahi.com

木曜～日曜掲載

■全国高校生英語ディベート大会の論題

2015年　日本国は、自衛隊の参加制限を緩和し、国際連合の平和維持活動に、より積極的に貢献すべきである。是か非か
14年　日本政府は、原子力発電所を廃止すべきである
13年　日本政府は、輸入米の関税を撤廃すべきである
12年　日本の大学は、9月から学年を始めるべきである
11年　日本は、死刑を廃止すべきである
10年　日本は、移民政策を大幅に緩和すべきである
09年　日本政府は、派遣労働を禁止すべきである
08年　日本は、法的な成人年齢を18歳に引き下げるべきである
07年　日本のすべての小中高校は、週6日制にすべきである
06年　日本は、英語を第2公用語にすべきである
※全国高校英語ディベート連盟のサイトをもとに作成

「聞く・話す・読む・書く」4技能駆使

高校生の大会 増える出場校

日本では高校生の英語ディベートの歴史は、まだ新しい。「第1回全国高校生英語ディベート大会」が開かれたのは2006年で、出場校数は17都府県38校だった。昨年は38都道府県64校に増えた。出場者からハーバードなど海外の名門大学の合格者も輩出した。

増加の背景にあるのが、国の英語教育強化策だ。文部科学省は13年末に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」で、高校の目標に「社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表」できることなどを例示した。ディベートを英語授業に導入している高校もある。

資料を読み、自分たちの主張を文章にまとめ、相手の主張を聞いて討論をする――。英語ディベートは、大学入試改革などで重視されている「聞く・話す・読む・書く」の英語4技能をフルに活用する競技だ。死刑廃止、原子力発電所の廃止など様々なテーマを賛否双方の立場から考えるため、批判的思考力やメディアリテラシー（情報を読み解く力）も養われると言われている。

全国高校英語ディベート連盟副理事長の松本茂・立教大学教授は「おとなしい生徒が、ディベートを体験すると化ける。考える力もつく」と話す。ディベートの目的は、相手を言い負かすことではない。「一番大事なのは、互いを尊重し、学び合う姿勢を育むことだ」とクギを刺す。

私たちのPKO論戦

いま子どもたちは No.956

英語ディベート 上

英語でディベートをする茨城県立竹園高校2年の（左から）上島理歩さん、高橋希実さん、小玉夏帆さん。米国のディベート専門家セオドア・シェッケルズ氏（右）も一緒に討論した＝茨城県つくば市

「日本国は、自衛隊の参加制限を緩和し、国際連合の平和維持活動（PKO）に、より積極的に貢献すべきである。是か非か」

6月中旬、茨城県つくば市で、そんな論題の「討論会」があった。学会でも市民団体の集会でもない。舞台は県立竹園高校の体育館。高校生の英語ディベート試合だ。

英語ディベートは、数人のチームが肯定側と否定側に分かれ、数分の限られた時間内で立論や質疑応答、反論を繰り出す「知的格闘技」だ。この日、論戦にのぞんだのは、いずれも茨城の進学校である竹園と水戸第一。特別ゲストとして、ディベートの本場・米国から来日した日米交歓ディベート全米代表のコーチと大学生が1人ずつ両校に加わった。

「More citizens' lives will be saved（より多くの市民の命が救われる）」「国連安保理の常任理事国入りをめざす国にとって、PKO参加は必要条件」。水戸一は肯定側の立論で、そう切り出した。

「Japan will lack in defense capacity against disaster（日本の災害対処能力が不足する）」。竹園2年の上島理歩さん(16)は否定側の立論で、日本が地震大国であることを念頭に指摘した。アタック（肯定側立論への反論）担当の2年高橋希実さん(17)は、中東の事例を挙げ、PKOだけでは紛争は解決できないことを訴えた。竹園ディベートチーム主将で2年の小玉夏帆さん(16)が隣で見守る。

早口の英語でたたみかける約45分間の熱戦。県内各地の高校生ら約300人が両チームに大きな拍手を送った。

竹園は、英語教育の先進校だ。英語ディベートや模擬国連の授業もある。英語部のディベートチームには、とくに英語好きの生徒が集まる。

高橋さんは2歳から英語を習い始め、中学2、3年の時に出場した「英語インタラクティブフォーラム県大会」で2年連続でトップの県知事賞を受賞。上島さんは小学1年から英語教室に通い、小学6年で英検2級に合格した。

ただ、小玉さんは中学までは剣道少女で、英会話を習ったこともなかった。転機は中学3年で参加した竹園の学校説明会。先輩が「日本のTPP（環太平洋経済連携協定）交渉への参加の是非」を英語で討論するのを見て、「こんな風に英語を話せるようになりたい」と、進学を決めた。

チームの目標は、毎年12月に行われる「全国高校生英語ディベート大会」だ。その年の論題が春に発表されると、各校は地域大会などでこの論題での討論を重ね、全国大会をめざす。竹園は07年から全国大会に毎年出場し、12年に3位、13年は5位になった。

だが、昨年は予選で27位。難関中高一貫校や名門高校がしのぎを削る全国レベルの競争は、年々激しくなっている。

「輝かしい先輩たちと比べると、私たちには自信やパワーが足りない」。26人の部員を率いる小玉さんはそう感じている。竹園のディベートチームは女子が8割以上を占めるが、全国大会では声の大きい男子チームも少なくない。

竹園ディベートチーム顧問のパクストン先生

「チーム全員が自信を持ち、聴衆にインパクトを与えることが大事だ」。オーストラリア出身の顧問、パクストン・アンソニー国際科講師(39)の助言を胸に刻み、先輩のビデオを見て話し方を研究してきた。

手ごたえは、少しずつ感じている。「PKO」が論題と発表されて1カ月もたっていない3月下旬。竹園は、「高校生英語ディベート春期大会in愛知」で、出場約20校の頂点に立った。「準備したものが効果的に使えた」と小玉さん。

練習は週に2回、放課後の2時間が中心だ。国連、外務省、防衛省、朝日新聞、産経新聞、日刊ゲンダイ……。各自がパソコンなどで国内外の様々な情報源にあたり、肯定・否定側の双方に必要なデータを集める。

国会で安保法制の審議が進む戦後70年の夏。例年以上に賛否の割れるテーマだが、部員たちに気負いはない。高橋さんは「英語力がつくだけでなく、一つの事象をいろいろな観点で見られるようになるのがディベート。時々刻々と動くニュースに、思わず耳を傾けたくなる」と話す。

（伊東和貴）

！ 英語ディベートに青春をかける高校生たちを追いました。全3回で紹介します。